

# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

134

(自然と現代社会)

地震国である日本は幾度も地震や津波の大災害を被ってきたことが歴史と発掘調査から明らかになってきている。3・11の東日本大震災と同じようなものは1000年も前に貞観大地震として記録されていた。天災は忘れた頃にはやってくる、というように、大震災は数千年のスケールで考えなければならぬ。

現在進行中の東京都知事選挙では原子力発電や大津波などへの大震災対策が争点の一つになっている。しかし、数千年のスケールでの災害の予測と対応よりは、目先の経済や生活問題が関心を呼ぶことは十分考えられるが、3年前の東日本大震災の記憶から、自然災害が生活に大きな影響を及ぼすことへの関

心も消えていない。梅下村塾(127)に掲載した「気仙の魂の奥に眠るもの」第一中学校文化祭の詠作品から「」には東京青梅市から数々の反応があった。第一中学校の生徒たちの自然への心と態度に感動していることが伝わってきた。

世界では、アラブの春に代表される中東、ソチ冬季オリンピックを目の前に控えたロシア、東北アジアなどでのテロや民族闘争など政治や宗教の対立による紛争が生じている。現代文明社会が引き起こしている問題は人類存続には自然と人間社会との関係を見直すことが不可欠であるというメッセージに真剣に立ち向かわねばならない。気仙地方の自然と歴史の奥には、これにこたえられる知恵が潜んでいる。

(世代を超えて響き合う心)

第一中学校文化祭創作俳句・短歌の作品評は梅下村塾(125)と(126)に掲載した。詠作品には地域の自然と暮らしへの思いが込められている。大船渡短歌会の有志がこれら詠作品への返歌を詠んでくれた。

中学校の仮設に住みて日々に見る国の未来を担う生徒らを

我が詠みし短歌に答え中学生「未来への道」とふ歌入賞知らせ来

雪つもる仮設の歩道を歩く生徒らの赤いほっぺに風花の舞う

一中生ら心身ともに恙なく仮設の我らに気づく

目の中の中学校の文化祭生徒ら踊る「前田鹿踊り」を

岩淵 綾子

堂に満つ生徒らの歌声聞こえて来て内職の針すすむ常より

す高らかに歌え未来信じて

「未来へと向きて学ぼう」と子ら言ひて被災する人らと笑顔で交流

未熟さが悔しいと奮起する心明日築かむ若人頼もし

冬木立まあい星の光ある明日ある子らよゆるりといきませ

田端五百子

中1男子

被災した老人の詠作品も、被災者に心遣いをする老人の詠作品も心に響いてきます。これにもまして、中1男子の詠作品の地域の自然を深く感受し、暮らしへの「ことかけ」は魂を揺らします。野分の道を返らす歌声、素晴らしい句です。これをつなぐと世代継承の素晴らしい世界が展開します。

開します。

(世代をつなぐ)

生徒らの赤いほっぺに風花や野分の道を返らす歌声

内職の針はすすむや常

よりも野分の道を返らす歌声

(東海新報記事から) 1月23日(木)の第1面の「世迷言」は日本人は外交を皮きりに論理をたてて人を説得することが苦手であると言われているが、腹を決めて立ち向かうことが大切であると言っている。

第2面には「杉尾氏招き新春講演会 気仙地区法人会 31日、大船渡商議所で」が掲載されている。杉尾氏はTBS「朝ズバッ！」に出演していて、柔らかい語り口からのコメントが取りえである。問題は日本のマスコミは「世迷言」に言われているような腹が決まった外交思想が伝わっていないのである。

大船渡商工会議所では何かのように討論されたのか東海新報が記事にまとめて報道してくれることを期待している。

特に中国と韓国との関係、それに米国が絡んでくると日本のマスコミの態度は煮え切らなくなってくるのが見受けられるからである。